

https://farid.ps/articles/we_live_inside_an_electric_circuit/ja.html

私たちは電気回路の中に生きている

人々が「宇宙天気」という言葉を聞くと、衛星を妨害する太陽フレアや極夜に輝くオーロラを思い浮かべるかもしれません。しかし、その本質において、宇宙天気は太陽から流れ出る荷電粒子の振る舞いに過ぎません。

太陽の外層は沸騰するプラズマで、非常に高温であるため電子と陽子はもはや原子に束縛されておらず、自由に動きます。真空管内の巨大なフィラメントのように、太陽は絶えずこの電気伝導性の流体を太陽風として放出しています。それは数百キロメートル毎秒の速度で太陽系を流れ、電子、陽子、アルファ粒子、そして絡み合った磁場を運びます。

地球から100万キロメートル上流のL1点にある宇宙探査機は、太陽風をリアルタイムで測定します。それらはどれだけの電子、陽子、より重いイオンが到着し、どれくらいの速さかを教えてくれます。静かな条件下では、風はわずかに電子の過剰を持つ傾向があり、惑星間空間はわずかに負の電荷の背景を持ちます。

太陽からコロナ質量放出（CME）が爆発すると、バランスが変化します。プラズマと磁場の巨大な泡が宇宙を掃き、地球の磁気シールドと衝突します。極地では、このエネルギーの一部が磁力線に沿って下方に流れ、酸素と窒素の原子を緑と赤の輝くカーテンに励起します：北半球では北極光、南半球では南極光です。

地球は何十億年もの間、この環境に浴してきました。プラズマに浸された導電性の物体は中性では留まりません。それらは電荷を蓄積します。地質学的時間を通じて、地球はその宇宙環境に対してわずかに負の電位に落ち着きました。

この認識は、宇宙から空への私たちの移行です。地球が負であり、その上の空間が電子と陽子に浴しているなら、大気そのものの中で電荷のバランスはどのように取られるのでしょうか？その答えは電離圏です。

電離圏と晴天の電場

電離圏は約50kmの高さから始まり、数百キロメートルに広がります。そこで、太陽の紫外線と入ってくる粒子が原子から電子を剥ぎ取り、薄いイオンのガスを残します。地上の私たちにとって、空気は絶縁体のように見えます。しかし、高度が上がるにつれてイオン化は急速に増加し、導電率は数桁増加します。

電離圏は1920年代に、物理学者ではなくラジオエンジニアによって発見されました。エドワード・アプルトンとその同僚は、ラジオ波が時折地平線をはるかに超えて伝播することに気づきました。信号は高高度の導電層から跳ね返っていました—現在私たちが電離圏のE層とF層と呼ぶものです。この「空の鏡」は世界的な放送を可能にし、アプルトンの業績はノーベル賞を受賞しました。

しかし、ラジオを超えて、電離圏にはより深い意味があります。地球を負の電荷を持つ導電性の球、電離圏を数十キロメートル上空の正に帯電した殻と想像してください。その間には大気があります：完全な真空でもなく、完全な絶縁体でもなく、漏れやすい誘電体です。それらは一緒に、約+250,000ボルトに充電された**球形コンデンサ**を形成します。

地上では、この電位は晴天の大気電場として現れます：約+100から+300ボルト毎メートルで、下向きです。言い換えれば、正の電離圏は電子を上向きに引き、表面を相対的に負にします。空気は高度が上がるにつれてより導電性になるため、この電圧降下のほとんどは最下部の10～15km—すべての雲と天気が存在する**対流圏**—で起こります。

静かな条件下では、この場は安定しており、世界中のすべての嵐のグローバルなリズム—**カーネギー曲線**として知られる毎日のサイクルによってのみ変調されます。しかし、この静かな基盤は雷雨のドラマの舞台を整えます。

雷雨は電気機械として

成長中の積乱雲の中で、何兆もの氷の粒子と液滴が衝突します。それぞれがイオンを持ちます：水に常に存在するH⁺とOH⁻。周囲の電場はこれらの電荷がどのように動くかに影響を与えます。小さな氷の結晶は正の電荷を得る傾向があり、上昇気流によって上向きに運ばれます。一方、より重いグラウベルは負の電荷を集め、中間レベルに落ちます。

その結果、**三極構造**が生じます：

- 4～7km付近の**主な負の電荷領域**、
- 雲の頂上（10～12km）の**正の領域**、
- 時には底部近くの**二次的な正の層**。

この分離は、19世紀の有名な実験を反映しています。1867年、ロード・ケルビン—熱力学的温度スケールで最も知られている—は、滴る水、リング、バケツだけで装置を構築しました。**ケルビンの水滴発電機**は、落下する滴の中の小さなイオン不均衡を利用しました。巧妙な誘導により、これらの変動は增幅され、装置から数千ボルトの火花が飛び出しました。

ケルビンの卓上装置は雷雨のミニチュア版でした。雲は同じ電荷工場のより大きなバージョンであり、重力、対流、衝突によって駆動されます。

私たちが見る雷のほとんどの雷は、負の中間層から地面に放電するものです。しかし、時には上部の正の領域がその電荷を解放します。これらの**正の雷**ははるかに強力で、より大きな電流を運び、数十キロメートル横に達します—悪名高い「晴天の雷」です。まれですが致命的で、晴天の場とは逆です：雲の正の頂部は直接地球に放電します。

したがって、すべての雷雨は**発電機**として機能し、正の電荷を電離圏に、負の電荷を地面にポンプします。地球の約2,000の活発な嵐は、グローバルな250kVの電位を維持し、さもなければ漏れるものを補充します。雷雨は単なる天候の出来事ではありません。それらは**惑星の電気回路の発電所**です。

宇宙に達する雷雨

何世紀にもわたり、雷は雲の底の下に限定されていると考えられてきました。しかし、回路は両方向に機能します。嵐はまた、**上向き**に、電離圏に、時には近宇宙まで放電します。

1990年代、宇宙線ガンマバーストを探していた衛星は、予期せぬものを発見しました：地球そのものからのミリ秒のガンマ線フラッシュ。これらの**地上ガンマ線フラッシュ (TGFs)** は、嵐の頂上にある電場が電子をほぼ相対論的速度まで加速し、空気分子に衝突してガンマ線を放出するときに生成されます。雷雨は**自然の粒子加速器**となり、人間が作った機械と競合します。

衛星がこれを確認するずっと前から、高高度のパイロットは奇妙な光についてささやいていました：赤い輝き、青い円錐、嵐の上に浮かぶハロのようなリング。1950年代のU-2パイロットはそれを見た最初の人々だったかもしれません、彼らの報告は光学的な錯覚として却下されました。20世紀後半になって初めてカメラがそれらを捉えました：

- **赤いスプライト**：80～90kmに達する巨大なクラゲ型の放電。
- **青いジェット**：嵐の頂上から50kmまでの狭い青い円錐。
- **エルフ**：雷の電磁パルスによって引き起こされる、90kmで広がる赤いリング。

これらはまとめて**一過性発光イベント (TLEs)** — 空の隠された雷であり、嵐を電離圏に接続します。それらは雷雨が局所的ではなく、グローバルなアクターであり、上方へエネルギーと粒子を注入し、ラジオ伝播、衛星軌道、さらには放射線帯を妨害することを証明します。

私たちは宇宙天気を地球に課せられたものとして始めました。今、逆を見ます：**地球自体がその嵐を通じて宇宙天気を生成します。**

回路の中で生きる

今、輪郭は明確です：地球、電離圏、宇宙はグローバルな電気回路で結ばれています。それでも、このトピックは分野間で不器用に収まります。

- **天文学者と宇宙物理学者**は太陽嵐と磁気圏に焦点を当てます。
- **気象学者**は雲、降水、地上の雷を研究します。
- **地球物理学者**は地震や火山を調査し、それらも電場を妨害します。

その結果、大気電気は隙間を通り抜けます。標準の天気予報は温度、気圧、風、湿度を提供しますが、**静的大気場**は提供しません、簡単なフィールドミルで測定できるにもかかわらず。

なぜそれを測定するのか？

私たちはすでにモデルを持っています。雷ネットワーク (Blitzortung、ALDIS、EUCLID) は、雷のラジオパルスである**スフェリックス**を追跡することで、リアルタイムで嵐の活動を示します。**静的電場**のために同じものを構築しない理由は？

そのようなネットワークは次のことができます：

- 正の雷の早期警告を提供し、最も危険な打撃。
- 嵐の発展を追跡：場の成長は対流を示し、極性の反転は消散を示します。
- 宇宙天気との結合を示す、CMEや宇宙線を地表面の場にリンク。
- 多くの人が「天気を体で感じる」と言うための科学的根拠を提供。

観測所への呼びかけ

多くの観測所はすでに大気電気を測定していますが、データは散在し隠されています。数年前に開始された**GLOCAEM** (Global Coordination of Atmospheric Electricity Measurements) と呼ばれる協調されたグローバルな取り組みは、ヨーロッパ、アジア、アフリカ、アメリカから約20~30のステーションを接続します。これらのサイトの一部—オーストリアのコンラッド観測所、スロバキアのロムニツキー・シュティット、スコットランドのエスクデールミューアなど—は、ポテンシャル勾配の継続的な監視の長い歴史を持っています。

しかし、Blitzortungのような雷ネットワークとは異なり、これらのデータフローは主に研究者の手に残っています。リアルタイムグラフは存在しますが、広く宣伝されておらず、一般向けに設計されていません。ほとんどの人々—物理学の学生でさえ—にとって、大気場は依然として見えません。

これがギャップです：測定ではなく、アクセシビリティ。必要なのは、**科学的アーカイブを開ダッシュボードとオープンAPIに翻訳すること**であり、スフェリックスネットワークが嵐の活動を誰もがライブで追跡できるものにしたのと同じ方法です。既存の研究ネットワークの上に市民科学の層を重ねることで、ループを閉じることができます—観測所の隠されたグラフを生き生きとした「第五の天気変数」に変えます。

絵を完成させる

私たちは電気回路の中に生きています。地球は負のプレート、電離圏は正であり、雷雨は発電機です。雷は最も目に見える症状にすぎません。スプライト、ジェット、ガンマ線、晴天の流れが残ります。

天気のこの隠された次元を公開の視野に持ってくる—データを開き、ネットワークを構築することで—空の理解を完成させます。それは私たちにより良い予測ツール、気候と健康への新しい洞察、そして驚嘆の感覚を回復させます：私たちが歩く世界は宇宙で回転するだけでなく、惑星規模の電気機械の中で輝き、唸り、火花を散らします。